

京鹿子

鹿子祭
1971年1月1日発行
発行所
鹿子祭実行委員会
〒100 東京都千代田区千代田1-1-1
電話 03-3551-1111

1月号

京鹿子祭特集号

豊田都峰

灌響集 その十七

青北風のころは身近にもの寄する
里山の灯ともしころの雁渡し
遠ひびきするは砧か妣の里
もうこだまかへらぬものに砧打
山の日をあつめて岐路の烏瓜
もみぢ散るひぐれの谷ぞら広げては



灯かげなるうしろとほくをちるもみぢ
ひとつづつ夕日とらへて軒端柿
わたむしのあたりにあした占ひす
虫残るあたりひとしほ闇集め
白百合の宙央の座は弥勒仏
弥勒仏秋香満つる真中の座
紅葉曼陀羅ひとしほ思惟深む仏

「現代俳句二月号」吉野ケ里十句掲載

嗟峨新年

丸山佳子



用の無い友に立ち寄りああ短日
禁札に木へん草かんむり枯れて
人体のつぼ大切と着重ねむ
賀状待ち柱鏡の一切空
嗟峨新年金ぶち名刺某女から

秀華採集

でで虫やあしたのための猿田彦

荒川美邦

「猿田彦」は岐路や道案内の神。この連想が洒落た作品にしている。遅々たる歩もまた止まりもひとつの導べということ。

湖に向き開く御堂や小鳥来る

竹下道子

遅れ蹤くかりがね一羽湖あかり

倉橋あつ子

御堂の在り方が渡り鳥の無事を祈る形であり、後句の「湖あかり」も一羽への祈りにも似た思いがこもる。これら三句に共通するものは対象への思い入れである。思い入れを通して作者を滲ませることは佳句を産む大きな手法である。

鈴鹿 仁

ちやんちやんこ

ふとこころに萬の鉾杉山眠る

文机に遠き父の背ちやんちやんこ

ちやんちやんこ着て世渡りの苦勞人

背にねむる一つのいのち小春風

柿紅葉いちまいごとの彩の世に

近 詠

和田 照海

祖谷溪

百姓の鶏をつぶして在祭

猪鬣を仕掛けて戻る禰宜の妻

火男のふどしのゆるむ里神楽

隠田の公達貌の案山子かな

三五夜や身をやはらかく赤子抱く

神麓集



笹子鳴く 林 日圓

声明や楽のふるさと笹子鳴く
声明は寺の音楽 初声す
寺を出し初音は平家琵琶となり
原点は魚山声明初うぐひす
声明の歌舞伎浄瑠璃冬ひばり

ハロウイーン 北村 香朗

ハロウイーン飾りつけたる銀座行く
どの窓も飾りつけたるハロウイーン
ハロウイーン銀座は歩行天國に
大小の南瓜が攻めるハロウイーン
ハロウイーンよき葉に化けし心地かな

龍の玉 藤岡 紫水

遣かより呼ぶ人のこゑ龍の玉
妻恋ひて越ゆる山河鹿月夜
力綱垂れて人見ず松手入
暮れの鐘小雨もつれて冬紅葉
散る紅葉灯影にゆらぐ観世音

松田 都青

萩散つて一つの過去が扉を閉ざす
鉛筆を削つたやうな秋が来し
九月果つ男の刻は大股に
天高く猫が出入りの非常口

服部 郁史

陽に祈り祖霊を拝し年新らた
三代の古都水明に初茶の湯
核持たぬ国の誇りよ青山河
初日出不戦の山河合掌す
一系を継ぐ山河や初明り

夜長 丹生をだまき

隅田川蕉翁像の秋陽浴ぶ
一冊と一献ありてよき夜長
萩の穂の白髪の揺るる水ほとり
蒲の絮大黒様のまぼろし過ぐ
少々のへそまがり良し冬うらゝ

神麓集



微熱とれ全身さらす秋風裡
爽やかや気合入れ試歩再会す
大気裂き天突き抜けに賜猛る
道租神のほとり一きは草紅葉
さきがけを誇らかに山は櫨紅葉

山田をがたま

風蝕の石佛に舞ふ朴落葉
悲しみの句読点とす朴落葉
爆ぜるはをんなの鱗朴落葉
裏木戸は親しみ易し朴落葉
朴落葉むかし一揆のありし村

朴落葉 柴田 朱美

辛卯元旦 竹貫示虹

よろしくは甘えならずや年賀の辭
兄弟逝き辛卯元旦欠禮す
三ヶ日何がめでたいひとりもの
辛卯の新春に言葉の矢傷かな
寒三日月寄らば斬るぞの歸り道

時雨忌 伊藤 希眸

急ぐなよ時雨の森に紅熾る
真昼間の時雨ゆるせよ派遣切り
肩濡れしまま朝時雨やりすごす
無人駅いくたび通る時雨かな
大欠伸ふと胸にくる時雨の忌

語らひ 北川 孝子

語らひや萩の葉裏のうすあかり
秋寂ぶや根の熱き髪ほぐしつ
夕映えて秋へいざなふ野のけむり
駄菓子屋に婆ちやんふたり秋深む
虫名残分厚き封書届きけり

落葉 丸井 巴水

身の錆びを落しあぐねる枯木山
謎ひとつ解けて落葉の帰り坂
流さるる遊びもありて加茂の鴨
稲妻やいまだ案山子の脚湿り
木枯しとなる瀬戸際の村はづれ

明王の眉間の皺の秋思かな
川崎光一郎
秋ともし気になる机上の積んどく書
通帳に利息三円秋高し
時ならぬ異常気象や穴惑ひ
登音に聞耳たてる夜の落葉

一介の夫は酌めりとろろ汁
小堀寛
或る女一皮剥けり夜来香
菊といふ名を給ひけり海を向く
遊ばざるもの書を読むなかれ秋
一切経煙のごとく秋深し

窓ごとに異なる色の楓かな
高木智
本年の紅葉克つ散る森の奥
風ありと見えず紅葉の散る二三
紅葉晴バスが三台来て止まる
枝変へて一樹三度の赤もみぢ



海道賞受賞作品

流山市

伊藤希眸

既作

残る虫庵の霊ぬく壁の穴

月へ発つ鱈を何枚もてばよい

紅葉ひとひら飛天と化せり吉野門

蜥蜴這ふ庭石ずうつと太古なり

青葉風捕へてみれば鉋屑

おほかたは烏瓜の花星仰ぐ

水爆のうらはは迷宮かも知れぬ

耳も目もさくらに盗られ姥ざかり

風神は琳派か紅葉吹き上げる

げんげ野や縄文土器に指のあと

新作

梧桐の木下ゆらゆら睡魔くる

花野から花野へ有体離脱かな

昼星の黒ずんで落つ熱中症

綿虫や門標の文字書き直す

琥珀に虫はるか夏空曳いてくる

座禅てふ隠遁街に風花とぶ

残る夏砂浜に追ひ沖に追ふ

日向ぼこり一反風呂敷につつむ

沢水の棲み潔むなり山椒魚

狐火の遠野のむかし膝に乗せ

筒鳥に韻きあふ岳屹立す

凧や木々はただしく身をそらし

人面の冬瓜買つてしまひけり

声明の森の胎より春の風

下り籟白紙のやうな一と日なり

シユウクリーム誤解の詰つてゐる立春

みらい願望糸瓜ずどんと垂れてをり

未完の塔辛夷の白にふれたくて

風はクリスタル紅葉は赤い音たてて

夜桜や鬼女も嘆くよな朽ち社

京鹿子大賞受賞作品

枚方市

森 茉莉

茄子漬けて明日を信じてゐる不思議

病院の廊下の奥の大枯野

寄席涼し戀の病に痩す咄

月曜の風の戸惑ふ大刈田

うしろかげとみにはかなし蓼は穂に

木の葉髪ふりむけば捨つるものばかり

訣れの手振れば生命線霧らふ

満員のバスは方舟しぐれ町

灯がひとつ通り銀河を深くする

追ひ風に浮き足立ちて落葉坂

死にかたがこんな手近にまんじゆしやげ

冬銀河睡りの中へ流れ入る

京鹿子新賞受賞作品抄

亀岡市

並河富有野

遠嶺は氷室の里なり父母恋し

石路の花晩年遠くまた近し

蚊帳吊草手繰れば匂ふ記憶あり

子犬にも道をゆづりし花野なる

蝉時雨とぎれしままに本を閉づ

秋晴や孫のお絵書き五重丸

鶏頭や庭石濡らす昼の雨

枇杷の花里にまだあるつるべ井戸

道端の小さき地蔵に柿二つ

花終夜風にこぼれ母を恋ふ

峡谷や水音高し初紅葉

裏門に笑つて揺れてる檀の実

京鹿子新賞受賞作品

紀の川市

辻 本 俊 子

いづかたへ青春の日の夏帽子

鶯高音勸行僧の青つむり

潮騒の夜の浜木綿手も触れず

鰯雲きりん静かに頭を上ぐる

炎天の熊野の鴉身じろがず

朝まだき露の言葉を撚り合はせ

子の発ちし轍の闇に虫すだく

穴まどひ蒼穹忘じ難く候

虹の根のあたり我が家のあるあたり

夫のあり光る川あり鳥渡る

父と子の急ぐともなき月の道

来し方は風の歳月石路の花

京鹿子新賞受賞作品抄

岡山市

佐藤千恵

どの家もカンナ咲かせて漁夫の村

行列の毛槍のふれし秋の雲

十六夜や箒築の音にゆらぎぬて

遠太鼓なみなみと注ぐ濁り酒

門をきしませてをり萩月夜

古甕に水なみなみと文化の日

虫時雨渡り廊下の灯されて

寺小春古りし魚板の罅深む

名月の光にぬれて父の椅子

都鳥橋の向かうに仁左衛門

餌台に石の小鳥も色鳥も

クリムトのふたりを濡らす冬の霧

募集大作賞

京都市

佐藤真隆

沙門空海

竜天に登るがごとき入唐僧
蓮の実の飛んで三千大世界
身に入むや真言秘密の仏たち
極月の曼荼羅にある方と円
極彩の十二神将鵙猛る
空海の霞食らひて高野山
滴りて焰青めく明王像
鷹鳩と化すや空海捨て聖
灼熱のタントラ仏にある渴き
山粧ふ空海すでに生き仏
月天心月に焦れし求道僧
魂の山に鎮もり山眠る
弦月や五臓たちまち覚醒す
山滴る万物すでに仏たり

双滴賞受賞作品

都峰 三賞

抱きたし春の戸口へ立つものを

天の川二夕夜寝かせし願ひごと

亀鳴くやそれほど恋しとはいへず

加藤 翅 英

西 條 李 稞

杉 浦 満 子

佳子 三賞

まちの名のひらがなとなる蕎麦の花

出来るだけ小春日和の顔でみやう

なかんづく子供は宝金亀子

門 馬 貴美子

吉 田 星 子

田 中 卯佳美



京鹿子集

豊田都峰選

でで虫やあしたのための猿田彦

朝月を袖だたみして秋遍路

適温の人と並びて栗の飯

踏み出せば目から鱗や青りんご

湖に向き開く御堂や小鳥来る

朝霧や余呉に影なき舟の音

鳥渡る夕陽のなかの近江富士

城山の音を封じて霧の雨

遅れ蹤くかりがね一羽湖あかり

城の史きざむ一石霧しづく

城陽 荒川 美邦

草津 竹下 道子

倉橋あつ子

河原撫子うたげのあとの燠にほふ

丹波路は海の底めく霧の朝

菊扇師より預かり米医師へ

あつさりと猛暑終はりし砂漠町

秋荒野マイルストーン確かめて

アリゾナで五度目の秋や心研ぐ

栗の皮むく包丁の刃かな

生々と喜寿も傘寿も秋をどり

踊る手に実りの鈴の高鳴れり

舞茸を妙めて旨き夕餉かな

アツ子 伊吹 之博

酒田 藤波 松山